



【人が幸せで長生きする為の神の命令】

聖書本文:エペソ人への手紙6章1-3節/ 暗唱聖句:出エジプト記20章12節

説教者:鄭南哲牧師

(Rev.Jung nam-chul)

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん、先週GWはいかがお過ごしですか。今年は連年と違って、新型コロナウイルス感染拡大の為、GW中子どもの日でさえも、外出も避けてほとんど自宅で過ごされたと思います。ワクチンがまだ正式にない状況の中、アメリカのレムデシビルや日本のアビガンなどの薬が承認されつつさらに利用されそうですね。まだ安心してはいけませんが、最近愛知県では感染者が出ない状況が続き、徐々に落ち着いて来ているような気がします。しばらくコロナウイルスとの不便な同居が続くとは思いますが、どうか5月までちゃんと治まって少なくとも6月からは教会、学校、日常生活が通常通り戻り、再開出来る事を是非共に祈っていきましょう。振り返って見ると、もう3月の春休み以前から、4月から緊急事態宣言があり、後延長され、5月までずっと学校の休校が続いているので、家の子供たちや学生たちはどれほどストレスが溜まっているでしょうか。しかし、コロナ渦中であって、家で一番大変で、疲れている方は断言お母さんたちではないでしょうか。本日は今年母の日感謝礼拝です！どうか今日の一日だけでも、お母さんたちの代わりに、食事を作って上げたり、皿洗いでも手伝ったり、お母さんに是非感謝と励ましを！愛と祝福を表す主の日となりますように切にお祈り申し上げます！今月中にも、今年一年中にもずっと教会のお母さん方々が幸いを得て、日々健康でありますように祝福をお祈りいたします。

<母の由来？教会から広がる>

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！母の日の由来も実はキリスト教会から始まったことを御存知ですか。17世紀の時代、イギリスでは、教会の復活祭(イースター)40日前の日曜日を「Mothering Sunday」と決め、主人が使用人を里に帰らせる日としたのが始まりです。その日になると、家から離れて仕事をしている人たちを実家に里帰り(さとがえり)して母親と過ごすことが許されていました。このとき贈り物として、「Mothering cake」(お母さんのケーキ)というお菓子を用意したそうです。

アメリカでは1900年代のヴァージニア州から母の日の起源といわれています。1905年5月9日、アンナ・ジャービスという人の母親が亡くなりました。やがて彼女は、「亡き母を追悼(ついでう)したい」という想いから、1908年5月10日、フィラデルフィアの教会で白いカーネーションを配りました。これがアメリカで初めて行われた母の日だそうです。この風習がアメリカのほとんどの州に広まりました。そして1914年、その時のアメリカ大統領だったウィルソンが5月の第二日曜日を母の日と制定しました。

日本ではどう始まったのか御存知ですか。日本で初めての母の日を祝う行事が行われたのは明治の末期頃で、1915年(大正(たいしょう)4年)に教会で祝われ始め、徐々に一般に広まっていったと伝えられています。昭和に入ると3月6日を母の日としていました。この日は当時の皇后(こうごう)の誕生日であったそうです。現在のようになったのは、戦後しばらくしてからだと言われています。また、一般に広く知れ渡ったのは1937年(昭和12年)森永製菓(もりながせい)が告知(こくち)を始めたことをきっかけにするとも言われます。

実は、聖書ほど、キリスト教のほどに親を大事にし、親の存在を大事にし、親孝行を強調しているところはないと思っています。

1. 人間にとって一番大きな罪は？(神を愛する=親を愛する・神に逆らう=親を逆らうと同じである)

神様は神ご自身のため、そして私たちのために律法を授けられました。言い換えると、神様がどれだけきよいお方なのかを表すために、そして人間そのものはどれだけ罪深いものなのかを表すために律法を定められたのです。この律法の中での代表が十戒です。この十戒のはじめの四つは神様と人間との関係を、そしてほかは人間と人間との関係を扱う律法だと言えます。その中神様から与えられた十戒の中で第五番目の戒めである“親を敬いなさい”という戒めは人として第一に守るべき神様の命令であり、責任であることを言われています。神を信じる人であっても、そうじゃない人たちであっても、神によって造られた者はすべてまず、一番あなたの親を敬うこと、従うことを命令して下さっているのです。今日の御言葉によっても親に従うと言う事は神様の命令です。親に従いなさいという御言葉は人間と人間の間で守るべき律法の中で一番初めに出てくる神の戒めの命令！聖書で親に敬う事について頻繁に言及するほうではありませんが、神様はこのことを言われるときとっても厳しく言われていることに私たちは目を留めなければなりません。「自分の父または母をのろう者は、必ず殺されなければならない。」(出21:17)

申命記21章18-21節では「かたくなで、逆らう子があり、父の言う事も、母の言うことも聞かず、父母に懲らしめられても、父母に従わないときは、その父と母は、彼を捕らえ、町の門にいる町の長老たちのところへその子を連れて行き、町の長老たちに、「私たちのこの息子は、かたくなで、逆らいます。私たちの言うことを聞きません。放蕩して、大酒飲みです。」と言いなさい。町の人はみな、彼を石で打ちなさい。彼は死

ななければならない。あなたがたのうちから悪を除く去りなさい。イスラエルはみな、聞いて恐れるために。」

愛する信仰の家族のみなさん！とても恐ろしい言葉ではありませんか。神様はこのように親を敬わない者を重罰で治められました。ところが、実際、親を逆らって従わない者に与えられる重罰が神様に対して罪を犯した者に与えられる罰とほぼ一緒であることを私たちは知らなければなりません。これはとても大切な真理です。聖書では神様の御名を呪うか、神様の御名を冒瀆する者に石で打ち殺すようにしたからです。

レビ記24章15-16節には「あなたはイスラエル人に告げて言え。自分の神をのろう者はだれでも、その罪の罰を受ける。主の御名を冒瀆する者は必ず殺されなければならない。全会衆は必ずその者に石を投げて殺さなければならない。在留異国人でも、この国に生まれた者でも、御名を冒瀆するなら、殺される。」 もちろん旧約時代のように実際我々はそのようにはしませんが、それほど親に逆らう事が神様に逆らう罪と等しいほど深刻であると神様はご覧になることを私たちは忘れてはいけません。

神様は親を冒瀆することがつまり神様を冒瀆する事であり、親に従わないことは神様に従わないことと同じみなされます。

そういうわけで今日の本文であるエペソ人への手紙6章2節で、「**あなたの父と母を敬え。**」これは**第一の戒めであり、約束を伴ったものです。**」といわれています。

<今日の本文の背景>

エペソ人への手紙が書かれた時代的背景を調べてみると、今日の時代に劣らないほどすばやく社会的変化が伴った時代でした。時代は1世紀のローマ帝国時代です。全世界を征服したローマ帝国がもたらした植民地文化と開放的なローマ文化は当時の既存(きそん)伝統と家庭倫理の崩壊を促進させ、加速されていました。今までは家庭で親の権限が重視され、従順と純潔で守られてきた伝統や文化がローマの植民地となりながらいっきに崩れ去っていました。淫乱なローマの偶像と文化の影響によって女と子供は蔑まれ、夫たちは妻を捨て、子供を捨てるようになり、また人に階級(かいきゅう)をつけて、優秀な人間と奴隷に分け、身分によって人を評価することになり入(いり)乱(みだ)れて舞(まい)っていた時代でした。使徒パウロはこのような背景の中で小アジアでも一番ローマっぽかったエペソでイエス様を信じてクリスチャンになったエペソにある教会の聖徒たちに、何を伝えたかったでしょうか。何よりもクリスチャンたちといえば崩れ去っていく家庭を改めて立ち上げ、守るべきだということでした。特にエペソの6章で使徒パウロは親に対するクリスチャンたちの責任を論じながらこれがまさに神様の祝福の約束をともなった第一の戒めだと強調しました。

2. 聖書に書かれている美しい親孝行の模範

聖書には美しい親孝行の話がいくつか記録されています。その中でとても美しい話は旧約聖書のルツ記です。今日の家庭問題の一つとして扱われることが姑(しゅうとめ)と嫁(よめ)の間柄です。しかしルツ記では信仰と親孝行、しゅうとめとよめの間での問題が信仰を通してすばらしく解決されて調和を保っています。ルツは舅(しゅうと)と夫の突然死にもかかわらずひとりぼっちになった夫の母であるナオミから離れないで、むしろナオミを敬い、ナオミが信じていた神様を共に信じたため、不幸を乗り越えてどれだけ祝福された逆転人生になるのかが明確に記されています。ちなみに美しい家庭を描いている方々はぜひお勧めします。ぜひ読んでみて下さい。

そして新約聖書に出てくる美しい親孝行の姿はだれよりもイエス様から見出されます。イエス様の肉親は MARIA とヨセフでした。聖書に書かれている箇所はありませんが、父であるヨセフはそんなに長く生きず、MARIA よりはやく天に召されたようです。そんなわけで家庭のすべての責任がイエス様に回されたかも知れません。ですからイエス様は30歳になるまで大工として家族を扶養(ふよう)しなければなりません。きっとイエス様は最善を尽くして母と弟たちを養(やしな)われたかも知れません。そのようなイエス様の心は十字架につけられた時でさえ母に対する息子としての愛情が表されます。くぎを打たれ十字架につけられ残酷な苦しみと死の寸前！自分のことでしか到底考えられない最後の時でさえ、イエス様は目をあけて前に立っている母 MARIA を眺めました。そして有(あ)一(いち)に残(のこ)って十字架にまで一緒についてくれたヨハネを眺めました。ヨハネは弟子たちの中で一番豊かだった弟子でした。イエス様は最後にそのヨハネにお願いする場面が具体的に記録されています。

みなさんもお存知のように、ヨハネの福音書19章26-27節です。「**女の方。そこに、あなたの息子がいます。**」と言われながら、弟子を指し、そして弟子に向かって“そこにあなたの母がいます。”と言われ、二人をつなげてくださいました。その時からその弟子は MARIA を自分の家に引き取ったと書かれています。イエス様は自分がこれ以上母である MARIA の面倒を見る事ができず、MARIA が一人になることを考え、最後の瞬間でさえ自分より母をかえりみる場面を私たちは忘れてはならないと思います。そしてイエス様の弟子である私たちも最後まで力を尽くして親をかえりみ、

つかえるべきだと思います。順序が大切ではありませんが、出エジプト20章12節「あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとしておられる地で、あなたの弱いが長くなるためである。」では父と母を敬えと言う神様の命令に父と言う単語が母よりさきに出ています、レビ記19章3節では母がさきに出ます。何の意味でしょうか。なぜ出エジプトでは父をさきに立たせ、レビ記では母をさきに立たせるのでしょうか。これはつまり神様が教えようとしている事は子供たちが敬うべき、愛するべき対象は父であれ、母であれなんの差がないことではないかと思ひます。父に欠けている面があっても、母に欠けている面があっても尊敬されるべき対象はどちらではない父と母であることを言っているのではないかと思ひます。特に年を老いた親を一度考えてみてください。聖書ではしらがを栄光の冠(箴言16章31節)だと書かれていますが、今日はいままで子供たちのために苦勞してきた親のしらがが栄光の冠どころか、むしろ卑(いや)しんでないがしろにされる苦勞の冠になってしまったような感じは消されません。親を敬わないことはまさしくイエス様ご自身が実践された愛と犠牲を自分は行わないことです。こんにちの社会風潮(しゃかいふうちょう)の中であつてもイエス様の模範と命令に従つて私たちがまず親を敬い、尊重する模範になることによってこの世の眞のクリスチャンとしての光と塩となりますように主イエスキリストの御名によって祝福します。

3. 神様が教えて下さっている親の存在

もしもこのように言い張る子供たちがいるかも知れませんが、いままで父が、もしくは母がはたして自分をどれだけ愛してくれたのか。私にお小遣いや必要をどれだけ満たしてくれたのでしょうか。勉強を十分させてくれたのか。と言ひ張るかも知れませんが、もちろんこんにちの時代は親としての基本的役割でさえ放棄し、子供を捨てたり、殺したりする悪い時代となっていますが、子供たちも自己中心的にただ自分の親が自分に何をやってくれたのか基準で、その分親に返そうと振舞いをしようする傾向もあります。しかし、みなさん、確かな一つがあります。父と母は自分を産んで、育ててくれたということです。そういうわけで自分たちがいま存在するのです。みなさん! 親孝行に条件はありません。聖書のどこにもそのような条件を神様は付けておられません。うっかり忘れてやれなかったのではなく、その必要がなかったので条件無しに親孝行を命令されました。親の品行に等級(とうきゅう)を付けて適当にそれに応じて敬いなさいという言葉は付けて出ていません。

子供たちはたえず親としての資格を要求しますが、親はえらくても、足りなくてもただ子供たちがいいふうになれることを願うばかりです。私たちは3才以前の時は覚えませんが、しかし私たちの親だけはその姿を覚えています。なぜならどんな状況においても親は私たちを育ててくれたからです。負ぶってくれたし、食べさせてくれたし、抱きしめてくれたし、自分の乳房で命を分け合ってくれたからです。神様が私たちを愛されたため、イエスキリストによって私たちを救ってくださったように。自分があまりにも幼(おさな)くて、なんの力もなく、かえて自分の力では生きていけない時親の愛によって私たちが生きることができ、今もなお生きていることを忘れないで下さい。

ユダヤ人の知恵の書と言われるタルムドには次のようなことが書かれています。神様はこの世のどこにでもおられることはできませんでした。そういうわけで“私の代わりにあなたの母を送り出したのだ。私には背中がないので母を送って子供たちを背負(せお)させたのだ。私には胸がないので母の胸で子供たちを抱かせた。私には命の乳腺(にゅうせん)がないため母を送り出して命の乳腺で子供たちを養ったのだ。私にはあたたかい手で守られないため母を送って彼らを育てたのだ。”つまり神様は神様の代理者として、愛の御手である母を送って私たちを養われたということです。

親は子供たちがどうしても言うことを聞かなかった時、出て行けといいながらもその子供がマジで出て行くとうとうと心配します。これはまるで罪を犯してしまった人間をエデンの園から追放(ついほう)させたにもかかわらず最後まで人間をかえりみてくださった神様の様子と似ていませんか。“あなたがたは私に背をむけて罪を犯したのでエデンの園から追い出したのだが、それにしてもあなたがたをけつて見捨てはしない。”と言われながら捜し求めて結局イエスキリストを送って十字架上で尊き血を流させ私たちを払い戻される神様の愛の中から親の愛も見出されませんか。エペソ人への手紙6章2節に「あなたの父と母を敬え」これは第一の戒めであり、約束を保ったものです。」とかかれています。神様はむしろこの命令こそが幸福な私たちの人生への特別な配慮だと言われます。ほかの律法にはない唯一無二の祝福が約された律法なのです。出エジプト20章12節を読んでみてください。「あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとしておられる地で、あなたの齢が長くなるためである。」今日の本文であるエペソ人への手紙6章3節にも「そうしたら、あなたはしあわせになり、地上で長生きする」という約束です。」と言われました。そのように親孝行することが私たちには有益であり、幸いだからです。

4. 聖書が教える「親を敬う」という意味＝神の祝福(長生き・幸せに生きる)の約束と鍵

愛するみなさん！いつも、毎年この敬うことってどういう意味を教えつけてきていますがちゃんと覚えているでしょうか。ヘブル語で、‘カバド(kab hed)’、つまり“重み、大事においておく”と意味がある単語です。つまり、敬うっていうことは親の存在を尊重する(重んじる)と言う意味なのです。これは人間的な倫理水準を超えて心から親をきわめて大切にすることを意味する意味なのです。“言葉や行いで親を無礼に軽んじく接しない、無視せず、その存在のままの存在で尊重し、きわめて大切にすることを心と態度！”これが敬うことでしょう。

今日は私たちはそのような心と態度をもっていますか。

かえって親に傷をつけてはいないでしょうか。かえって親に面倒をかけてはいませんか。かえって親の財産とか親が持っているもののため親を自分の必要のためただ利用したのではありませんか。親にむやみに振る舞ったり、言葉で無視したりしたことはなかったのでしょうか。

今日の御言葉は親に対するそのような振る舞いこそ、神様を無視し、侮(あなど)る、神様への不信仰的な姿です。言い換えると、先ほどもうしあげたように、親を敬わない人は神様を正しく敬うことができないということです。目に見える親を敬うことが出来ない人がどうやって目に見えない神様を敬えるのでしょうか。

愛するみなさん！両親を敬えない家庭はすでに家庭の模範と秩序が破れている家庭です。ですから、みなさんの人間関係、みなさんの夫婦関係を回復するため優先に点検するところが親との関係かも知れません。「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」(マルコの福音書 12章 31節)。今日のこの親を敬いなさいという御言葉は神様の地上命令です。我々の中この御言葉を知らない方々は少ないと思います。ところで、みなさんの隣人の中で一番近い人は誰でしょうか。まさに、みなさんの両親です。ですから、みなさんの父母親をよく従わないと、律法全体に従わない者になってしまいます。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！親を敬うべきこの神様からの命令は、親の為にもなるのは当然ですが、実は、そのように従うことで、一番祝福される対象は、子どもであるみなさん自身！になることを一生忘れないで下さい！神様は両親に従い、敬う子どもたちには量的には長生きになり、質的には人生の幸いの祝福を赦して下さいます。みなさんと子ども、家族が幸せに生きる為、地上で長生きする為には、人として、まず守るべきあなたの父と母を敬うことをしない限りがそのような神の祝福を頂くことは出来ない、それほど、神様は、祝福の約束と源として大切に、そして、明確に我々に教えて下さっているのです。

16世紀ブランの改革者だったカルビン先生は聖書が教えて下さる親孝行についてこう言われました。

“我々は神様のすべてが理解できなくてまるで矛盾のように見える時がありますが、神の御国に上って行くとすべてが理解できるようになるでしょう。ただはっきりと言えるのは、親孝行をしなかったのに長生きするのは生きるその自体が神様からの罰であることを覚えなければなりません。”ですから、みなさん！今日我々人生と子供たちの有益のためでも、ありのままの親を理解し、親を許し、親を尊重し、愛することを始めましょう。そして、神様と両親の前で決して恥ずかしくない人生を過ごしましょう。

< まとめ > 16世紀の宗教改革者だったマルティンルーター先生は“親の方々はこの世の中で神様の代理人たちだ”だと教えました。

両親の存在と愛はまさに神様の愛を反映する小さな光たちだとそう信じております。今日神様は我々にイエスキリストの十字架によって値無し、条件なしの犠牲が何か見させて下さり、ただ、我々の有益、我々の救いのために御自分をお与えになったほどの神の真の愛を知っている我々にただ今神様はこう命令しておられます。

“あなたの父と母を敬え”と。この神の命令は我々がこの地上で幸せになる鍵であることを信じて下さい。この事が家庭の回復のための始めての鍵にもなります。自分の人生が祝福され、自分の子供たちが祝福されるためにはこの主の命令に従順しなければならないことを今日みんなしっかり心に受け止めて下さい。「思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもするのです。(カラテヤ人への手紙6:7)」ですから、さらに祝福される家庭と人生になれるように、親を敬うことの大切さを続けてしっかりと愛する子どもたちにも見せ続け教え続けて行きましょう。愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！神様の御言葉には偽りはありません。最善を尽くして両親に敬って下さい。ご自分の両親に、等しく夫や罪の両親も、そして、教会のお父さんやお母さんたちにも同じく、まだご両親が生きていらっしゃるなら、今から！今日から！改めて心を尽くし、最善を尽くして敬って下さい。後で悔いが残らないように。もし、もうすでにみなさんの父、母親が召されたのなら、これからは教会の神の家族の中お父さん、お母さんたちを自分の親のように大事にし、敬い始めて下さい。願わくは今年の今は、コロナ事態を通して、かえりみてない孤独な親と孤独死が増えている中願わくは、みなさんのその敬う姿を直接見て、我々の子供たちもしっかり学んで真似をして、親を敬い従うことにより、みなさんの時代にだけでなく、子供たちの時代に至るまでみんな長生きをして、幸いな人生と家庭となって過ごすことが必ず出来るように心から祝福をお祈り申し上げます。アーメン！